審 査 結 果 の 要 旨

報告番号	甲 第 1371 号	氏名	加藤 隆郎
審査担当者	主査 山下 裕史朗 (印) 副主査 恵紙 英昭 (印) 副主査 西 昭徳 (印)		

主論文題目：Sleep Structure in Untreated Adults with Attention Deficit Hyperactivity Disorder: A Retrospective Study
(睡眠障害を主訴とした未治療成人患者における ADHD 特性による睡眠ポリグラフ所見の特徴と主観的尺度との関連についての後方視的研究)

審査結果の要旨（意見）

神経発達症、特に ADHD では睡眠障害の有病率が極めて高い。成人 ADHD の睡眠障害に関する研究はほとんどなく、本研究は睡眠障害を主訴として来院した薬物療法されていない成人 ADHD と非 ADHD 患者の睡眠ポリグラフおよび主観的尺度の関連についての貴重な後方視的研究である。以下の 3 つの興味深い知見が得られた。1) PSG パラメータでは、中途覚醒時間および NREM 睡眠の睡眠ステージ SWS(特にステージ 3)が有意に高値であった。2) 主観的尺度では JESS、PSQI C7 の点数が有意に高く、MEQ-SA の点数で有意に低かった。3)ADHD 群において PSG による SWS(min)と PSG 後起床時睡眠アンケートの「睡眠の質」・PSQI の「睡眠の質」・JESS との間に有意な相関関係を認めた。小児 ADHD 児では、SWA が健常コントロール児よりも多く認められ、加齢と共に減少する。治療を受けていない ADHD 児では受けている ADHD 児と比較して思春期まで SWA 出現が多い状態が持続し、SWA が脳成熟や認知機能と関連していると言われている。SWA の解明が、ADHD の睡眠障害のメカニズム理解や治療につながりひいては認知機能改善につながることが期待され、今後 CAP subtype A1 を用いたさらなる研究につながる。学位論文にふさわしい内容と評価する。

論文要旨

睡眠障害を主訴に睡眠学精査を行った当科外来未治療成人患者を対象に、ADHD 特性の有無による睡眠ポリグラフ所見の特徴を見いだし、主観的睡眠評価尺度との関連を明らかにすることを目的とする。

2015 年 4 月～2020 年 3 月に久留米大学病院精神科及び睡眠外来を未治療で睡眠障害を主訴に初診し、睡眠検査を施行した 18 歳以上の患者(n=170)を対象に、DSM-5 で診断を満たした患者を ADHD 群、それ以外を非 ADHD 群の 2 群とした。その内 ADHD の関連疾患である、特発性過眠症、AHI≧5 の SAS、RLS、PLMD を除いた患者(n=55)を対象として、PSQI などの主観的睡眠指標および、PSG、MSLT などの客観的睡眠指標を用いて総合的に検討した。

非 ADHD 群との比較において

1) PSG パラメータでは、中途覚醒時間および NREM 睡眠の睡眠ステージ SWS(特にステージ 3)が有意に高値であった。

2) 主観的尺度では JESS、PSQI C7 の点数が有意に高く、MEQ-SA の点数で有意に低かった。

3)ADHD 群において PSG による SWS(min)と PSG 後起床時睡眠アンケートの「睡眠の質」・PSQI の「睡眠の質」・JESS との間に有意な相関関係を認めた。

今回成人 ADHD 群では、SWS が優位に高いという結果であった。しかし、この SWS の増加が正常に機能しておらず、認知機能障害に繋がっていることから ADHD 患者主観的・客観的睡眠評価間での乖離するというパラドキシカルな関係性を認めている事が示唆された。これらの病態生理をより明確にするためには今後、成人 ADHD 群に対し CAP スコアリングによる検討は、より詳細な病態解明に寄与することが示唆された。